

# 救済所を造った男は 榊原亀三郎 成岩の人です。

亀三郎は「べっこう亀」と呼ばれ、70人もの子分を持つ侠客きやくでした。しかし亀三郎は、弱者救済・更生保護に人生を懸けることを決意、いさぎよく組を解散すると同時に子分たちを説得、30人を更生させます。その彼らを引き連れからすね鴉根の丘に入ります。明治30年(1897)のことです。



榊原 亀三郎  
1868~1925

彼らが造ろうとするのは、誰もが差別なく暮らせる

『幸せの村』『新しい村』です。



がんばれ!



当時の鴉根は雑木林と原野の丘。まずは開墾。30人は力を合わせて働きます。作業は1年半も続き、ようやく600坪を更地にして宿舍2棟を建設。たった2棟ですが救済所の原型が完成です。

しかし地元の人々の目は冷やかです。「どうせヤクザのやることだ。何か裏があるに違いない」。でも、亀三郎たちはそんな声に負けず、どんどんと救済施設を造っていきました。そして帰る家を失った弱い人たちを受け入れ始めたのです。

## 亀三郎が弱者救済に目覚めた動機

亀三郎は講演でこう語っています。「私は11歳の時、一人の乞食こじきが非常に困難して居るのを見て助けさせて貰い、其者が其時に大いに喜んだのを見て、夫れが動機となって、どうしたら乞食が減るものであるか、どうしたら其乞食が立派な人間になれるかと云ふ考への為め、種々難多しゅじゆなんたの工夫をして…(略)」

(感化救済事業地方講習会講演集 大正6年(1917)発行愛知県内務部へんさん編纂)から

